December 号外 2024

過去と現在を行き来しながら、未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム vol.20(最終回) Document

UEMACHIDAICHI KONJAKU TIMES

発 行　大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所（CEL）／ 企画・編集　U-CoRoプロジェクト・ワーキング
（CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美）
問合せ先　tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）
ホームページ　http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html　※U-CoRo=ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）

上町台地 今昔タイムズ 第20号（最終号）記念

『上方』を編集発行した南木芳太郎（なんき よしたろう）氏。1932年12月17日、上方郷土研究会行事「更正二〇加」、北陽演舞場前に立つ（提供：南木ドナルドヨシロウ氏）

『上町台地 今昔タイムズ』第20号（最終号）記念のフォーラムを2024年10月12日（土）に開催しました。

大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所（CEL）/U-CoRoプロジェクト・ワーキングは、2013年秋から約10年余、『上町台地 今昔タイムズ』を発行してまいりましたが、2024年春発行の第20号が最終号となりました。

締めくくりとなる今回のトークライブは、かつての伝説の雑誌『郷土研究 上方』を発行した南木芳太郎のスピリッツを次代へつなぐべく、市井の歴史実践・郷土研究の粋をキーワードに展開しました。

コーディネーターに、谷直樹（大阪くらしの今昔館前館長）氏を、パネリストには、北川央（大阪城天守閣前館長）・橋爪節也（大阪大学名誉教授）両氏を迎え、CELの弘本由香里も加わりました。さらに会場からも5名のテーマにゆかりの方々のコメントをいただくなどして、対話を紡ぐことを試みました。大阪文化の特性を捉え直し、今後に向けて大切な論点を共有する機会にもなりました。

＊『上町台地 今昔タイムズ』や関連フォーラムのドキュメント・レポートのバックナンバーは、ホームページ「大阪ガスネットワークCEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

『上町台地 今昔タイムズ』第20号（1面）

上町台地 今昔フォーラム vol.20（最終回）

2024年 上町台地トークライブを開催しました（会場LIVE開催＋後日録画配信）

市井の歴史実践・郷土研究の粋、南木芳太郎と『上方』のスピリッツを次代へ

■開催日時：2024年10月12日（土）14：00～16：30頃
■LIVE会場：大阪ガス実験集合住宅　NEXT21 2階ホール（大阪市天王寺区清水谷町6-16）
■開催・参加方法：会場（参加人数限定）＋後日録画視聴（希望者対象に1カ月間限定配信）
■出 演 者：
　コーディネーター：谷　直樹（大阪市立大学名誉教授、大阪くらしの今昔館前館長）
　パネリスト：北川　央（九度山・真田ミュージアム名誉館長、大阪城天守閣前館長）
　橋爪節也（大阪大学名誉教授）
　弘本由香里（大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 特任研究員）
　コメンテーター：南木ドナルドヨシロウ（南木芳太郎氏曽孫）/古川武志（元大阪市史料調査会調査員）
　武部好伸（作家、エッセイスト）/藤本英子（（一社）日本景観文化研究機構理事長、京都市立芸術大学名誉教授）/竹村伍郎（NPOまち・すまいづくり理事長、地域情報誌「うえまち」発行人※WEB版）（敬称略・順不同）
■テーマ
　「市井の歴史実践・郷土研究の粋、南木芳太郎と『上方』のスピリッツを次代へ」
■主 催：大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所（CEL）　企 画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング

雑誌『上方』の表紙（00は号数）
3 天王寺研究号（1931年）11 大阪城研究号（1931年）22 道頓堀変遷号（1932年）46 大風水害号（1934年）50 大阪今昔図絵（1935年）70 第70号（1936年）75 第75号（1937年）100 第百記念号（1939年）115 続郷土玩具号（1940年）141 第141号（1942年）

「上町台地 今昔タイムズ」20号（最終号）記念トークライブ

上町台地今昔フォーラム vol.20の開催にあたって

企画担当　弘本由香里（大阪ガスネットワーク　エネルギー・文化研究所 特任研究員）

『上方』スピリッツを未来へ

このフォーラムは、『上町台地今昔タイムズ』(以下、今昔タイムズ）第20号・最終号記念のトークライブとして開催するものです。今昔タイムズは、歴史と現在をつなぎ、未来を考える手がかりとして活用されることを目指し、10年余に渡って編集・発行してきました。

この間、地域のみなさまがご提供くださった貴重な記憶や資料の数々と、研究者の方々の豊かな知見に支えられてきましたが、それを架橋する糧となったのが、戦前大阪で発行された『郷土研究 上方』(以下『上方』)でした。

そこで、本日は「市井の歴史実践・郷土研究の粋、南木芳太郎と『上方』のスピリッツを次代へ」と題し、谷直樹先生をコーディネーターに、北川央・橋爪節也両先生をパネリストにお迎えしています。

大阪城天守閣前館長の北川先生には、かつて取材時に、同館での南木コレクションとの出会いが、その後のお仕事や生き方に大きく関わっているのだとお聞きしました。

大阪大学名誉教授の橋爪節也先生は、これまで当フォーラムに何度もご出演くださり、大阪・上町台地の文化について多方面から紐解いていただきました。

また、大阪くらしの今昔館と弊研究所とは連携関係にあり、前館長の谷直樹先生には、大阪の歴史・文化について、常にご指導いただいています。

そして、もうお一人、ご存命であれば、ぜひともご出演いただきたかったのが、私どもと『上方』とを強く結び付けてくださった、亡き肥田晧三先生です。

上方文化の生き字引とも称された肥田先生には、今昔タイムズや今昔フォーラムで、たびたびお世話になったのですが、第13号で「苦しい時代の私を支えてくれた、雑誌『上方』の通読」と題したコメントを寄せてくださっています。

「『上方』は昭和19年まで続き、第151号で休刊。翌年の大阪大空襲で島之内のわが家も焼けて何もかも失くしたうえに、私は戦後、十年の長きわたる闘病を強いられます。その苦しい日々の中で、貪るように読んだのが、叔父が保存していて貸してくれた全冊揃いの『上方』でした。当時はその通読だけが心の支えになり、のちの私の人生を方向づけるものとなりました。」

肥田先生の言葉とともに、本日は、南木芳太郎と『上方』のスピリッツを将来へ橋渡ししていくための良い機会となればと願っています。よろしくお願いします。

市井の歴史実践・郷土研究の粋、南木芳太郎と『上方』のスピリッツを次代へ

コーディネーター

谷　直樹（大阪市立大学名誉教授、大阪くらしの今昔館前館長）

たに・なおき

日本の建築史学者。大阪市立大学教授、大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）館長などを経て、現在に至る。担当展覧会図録（共著）に『世界遺産をつくった大工棟梁：中井大和守の仕事』(大阪市立住まいのミュージアム）、単著に『町に住まう知恵：上方三都のライフスタイル』(平凡社、2005年)ほか。

南木芳太郎と『上方』の時代

谷 直樹　今回今昔タイムズが第20号（最終号）を迎えたということです。今日のフォーラムは、その節目のお祝いの会にしたい思います。

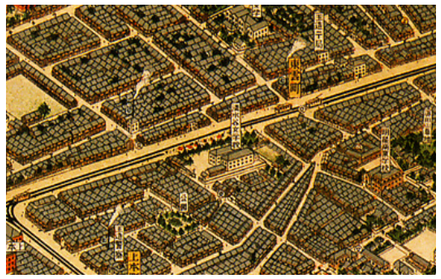
まずは大正13年（1924)発行の「大阪市パノラマ地図」をご覧ください❶。ここには大阪がちょうど「大大阪」になる直前の姿が描かれています。この地図を見ると、中之島あたりには、図書館、公会堂、日銀大阪支店、そして市庁舎などの近代建築が建ち並び、近代の都市景観が生まれていることがわかります。

上町台地付近では、真ん中あたりに清水谷女学校が見えます。その少し左の公園あたりが、今我々がいる会場です❷。周辺には、近代建築がまばらに見えますが、それ以外は江戸時代以来の町並みがつづいています。ちょうど大阪では都市景観の近代化が進んでいました。

❶「大阪市パノラマ地図」は、大大阪誕生前夜の大阪を詳細に描いている。大阪くらしの今昔館8階では、床いっぱいにこの地図が広がっています。

その急激な変化を惜しまれた方が、南木芳太郎さんです。『上方』の表紙を見てみますと、そのテーマは、現在の、そして未来の大阪にもつながるキーワードが選ばれています。

この今昔タイムズ20号は、非常によくできています。1、4ページが見開きという構成（P10の❶）で、そこに掲載されている『上方』の表紙絵には、大阪の伝統的なもの、失われつつあるもの、年中行事などが取り上げられています。



❷ 左図の大阪城南方の部分拡大。中央の学校は清水谷女学校。

そして中面の2、3ページを見ていただくと、地図の中に、表紙の曼荼羅絵がどんな場所にあるのかということが書かれています（P10の❷）。そして周辺には、右の一番上には南木さんの曾孫、南木ドナルドヨシロウさんのコメントがあり、その下に今日のパネリストの北川さんのコメントがあるという紙面構成です。これを読んで現地を訪ねるのに大変便利な編集になっています。

100年前の「大阪市パノラマ地図」には、近代都市に変貌する大阪の姿が見事に描き出されていました。『上方』は、このような時代の転換点に生まれました。まずは、この地図を頭に入れていただいて、パネリストのお二人のお話をうかがいたいと思います。

第1部　プレゼンテーション1

南木コレクションと私

パネリスト

北川　央（九度山・真田ミュージアム名誉館長、大阪城天守閣前館長）

きたがわ・ひろし

九度山・真田ミュージアム名誉館長。1987年より大阪城天守閣学芸員、2014年より館長を務め、2022年に退職して、現職。専門は、織豊期政治史、近世庶民信仰史、大阪地域史。著書に、『大坂城 秀吉から現代まで50の秘話』(新潮新書）ほか多数。

谷　北川先生からは、南木コレクションとの出会いと学びそれから南木さんの歴史実践が残したものについてお話しいただきます。

南木コレクションとの関わりのはじまり

北川　2年前に大阪城天守閣を退職して、只今は九度山・真田ミュージアムの名誉館長を務め、その肩書で活動しています。

今日は、『上方』を編集された南木芳太郎さんが収集された、所謂「南木コレクション」の内容と、私がそれとどう関わってきたかということをお話しさせていただきます。

昭和62年1月1日、私はこの日付で大阪城天守閣に就職しました。人事異動で大阪城天守閣に欠員ができたため、学芸員採用の募集があり、幸い合格して中途採用されました。

大阪城天守閣が購入

大阪城天守閣は昭和6年11月7日に開館しました。当時は「大阪城郷土歴史館」という名称だったようですが、現在活動している大阪市立の博物館の中では一番古い施設になります。

昭和17年9月25日に第二次世界大戦の激化に伴って休館になり、陸軍に接収されます。戦後はGHQに接収されて、ようやく昭和23年8月25日に大阪市に返還されて活動を再開しました。

戦後、大阪城天守閣は次の四つの柱で資料を収集し、活動することになりました。①大坂城を築城した豊臣秀吉の活躍した時代の歴史資料。それから②大阪の郷土歴史資料。③甲冑・刀剣などの武器・武具参考資料。そして④全国各地の城郭に関する資料です。

南木コレクションは、②大阪の郷土歴史資料に分類される資料群ですが、昭和36年に天守閣が約3000点一括で購入しました。価格は30万円。当時の大卒の初任給が1万円から1万2千円程度だったそうですので、現在の貨幣価値でいうと、7、8百万円程度になり、とんでもない安さでした。

これにはちょっと経緯があります。南木コレクションは、南木芳太郎さんが、戦時中は大阪市立美術館に預けられて、戦災を免れました。戦後、南木家として、これを一括で収蔵してくれる施設がないかということで、大阪の古書店として有名な高尾書店にその収蔵先を探して欲しいと依頼され、高尾書店も商売として、購入してくれそうなところをあたられました。まず最初に候補に挙がったのが戦時中の寄託先でもあった大阪市立美術館でした。

コレクションの中核が江戸時代の錦絵なので、同館が一番ふさわしいのではないかということで、高尾書店の店主である高尾彦四郎さんがお声がけされたそうです。ところが、同館では、肉筆の浮世絵しか収蔵には値しないということで、けんもほろろに断わられてしまった。

それから昭和35年に大阪市立博物館が開館しましたので、次にそこへ持って行かれた。博物館の方は、これはと思うものだけをピックアップして、それらだけを購入され、大半が戻されることになってしまった。

行き先を失って、高尾さんが大阪城天守閣にどうかという話を持って来られたそうです。当時の主任、今の館長にあたる立場にあった岡本良一さんは、どこにも相手にされなかった資料やないかと言って、買い叩き、それで一括30万円というとてつもない安い値段で購入した。

当時は約3000点ということだったんですけど、整理が進んできて結局は約4500点あることがわかっています。30万円という価格では、高尾書店はもちろん全く利益がなく、南木家もあてが外れたということで、コレクションの購入を機に高尾書店、そして南木家とは絶縁状態になったということです。

当時、資料購入の評価委員のお一人が考古学者として著名な末永雅雄先生だったんですけど、古書店にもちょっとは儲かるような値段で購入してやらんと、ええもんを持ってきてくれへんでと、岡本さんを諭されたという話を聞いています。

戦災で失われた「南木文庫」

南木さんのコレクションで、非常に有名なものに「南木文庫」がありました。南木さんは、歌舞伎やお芝居、演劇の研究者として知られ、関連する文献などをたくさん収集されていました❶。この「南木文庫」は『上方』刊行の資金にするために売却され、結局は戦災に遭って、現存しません。

❶ 南木文庫目録（信多純一氏蔵）

一方、天守閣に入った南木コレクションの方は、南木さんが『上方』編集の際に掲載図版などに使うために集められた一枚物の資料が主でした。

大阪城天守閣では、1961年にコレクションを購入したんですが、整理作業がなかなか進まず、ひとまずテーマごとに展覧会を開催し、展覧会の準備作業とともに整理を進めていこうということになりました。こうしてスタートしたのがテーマ展「南木コレクションシリーズ」で、1976年に第1回が開催されました。

第3回図録「上方の風景画展」

第4回図録「お化けの浮世絵展」

第6回図録「明治の錦絵新聞」

第7回図録「相撲の錦絵と番付展」

❷ 大阪城天守閣では、南木コレクションシリーズの展覧会を1976年から開催。

南木コレクションシリーズ

第1回から第7回までは、錦絵の展示でした❷。こうした企画を通じて、次第に南木コレクションの存在が知られるようになっていきました。

また、テーマ展とは別に「南木コレクションによる　近世大阪郷土資料展」という特別展も開催しました❸。

❸
テーマ展「南木コレクションシリーズ」とは別に、「南木コレクションによる　近世大阪 郷土資料展」（1970年6月1日～8月15日）という特別展も開催。

ところが南木コレクションの整理作業の方は一向に進まず、なかなか難航して、購入から21年経って、ようやく1982年に南木コレクション総目録の1が出ました❹。

❹
順次『南木コレクション総目録』を刊行する計画だったが、難航し、1982年にようやく第1巻（江戸浮世絵）を刊行した。

南木コレクション＝難儀コレクション

私が大阪城天守閣に入った当時、南木コレクションは「難儀コレクション」と言われていました（笑）。コレクションに難があるわけではなくて、歴史と考古学の分野しかいない大阪城天守閣の学芸員では手には負えない資料群という意味でした。誤解のないように。

結局は、甲南女子大学におられた松平進先生がご協力くださって、ようやく南木コレクションの整理作業が進むことになりました。

南木コレクションの中核は役者絵・芝居絵ですが、これらを整理するためには、その一枚の絵が、いつ、どこの劇場で上演されたどの演目のどの場面かということを特定していかなければなりません。よほど歌舞伎に精通していないと、とてもできる作業ではありません。それが2000点以上もあった。松平先生はそうした分野の専門家で、先生のご協力なしに、整理作業の進展はあり得なかったと思います。

南木コレクションとの出会い

私が就職後に初めて主担として展覧会を開催したのが南木コレクションシリーズ第8回の「上方のちらし・引札展」でした❺。

❺
就職後、初めて主担となった展覧会がテーマ展「南木コレクションシリーズ」第8回の『上方のちらし・引札展』（1988年3月6日～4月10日）。

私は、もともと大学の学部・大学院では日本古代史を専攻していました。古代史研究に行き詰まって近世に転向したんですが、この展示をやれ、と言われた時には、正直、引札が何なのかも全く知らない状態でした。

転機となった「引札」展

手探りで準備を進め、何とかオープンに漕ぎ着けたのですけれど、結果として、この展覧会は非常に好評を博して、メディアでも多く取り上げられました。たくさんの方にお越しいただきましたので、翌年も第2回の展覧会を開催することになりました。でも当時は予算がなくて図録を出せない状況でした❺。ところが、この展覧会をご覧になった東方出版の今東社長から、2回の展覧会の成果をまとめて本にしませんか、というありがたいお話をいただいて、1992年の5月に本を出すことができました❻。

❻
東方出版からの申し出を受け、2回の展覧会の成果を『大阪の引札・絵びら【南木コレクション】』という豪華本として刊行（1992年5月）

翌年には特別展「“上方”への誘い―南木コレクション名品展―」を開催❼。上方にコーテーションマークをつけたのは大阪の上方文化の世界と、南木さんが編集された雑誌『上方』の世界と、両方の世界へのいざないという意味からでした。この展覧会を開催することで、私は南木コレクションがどういうジャンルの資料で構成されているのか、主な資料にどういうものがあるのか、ということをおおむね把握することができました。

❼
特別展『“上方”への誘い―南木コレクション名品展―』（1989年10月8日～11月12日）を開催。

写真展を開催し好評を博す

続いて南木コレクションシリーズ第10回のテーマ展「古写真　なにわ風景」展を開催❽。大阪城天守閣が購入した時点では、写真には資料としての価値が認められておらず、先ほど言った約3000点という点数には、写真は入っていませんでした。でもその後、写真はとても価値のある資料だという評価が出てきて、今は古写真も南木コレクションの資料としてカウントするようになりました。そうした古写真も含めて、かつては資料として扱われてこなかったものも再評価してカウントした結果、資料の総数が増えて、現在は約4500点ということになっています。

かつて大阪城天守閣では、秀吉関係や武器・武具、またお城に関する展覧会にはたくさんの方がお越しくださるけれども、大阪ものの展覧会はお客が入らない、と言われてきました。でも、「大阪の郷土歴史資料」は四本柱の一つなので、展覧会をやる責務があるということで、取り組んできました。

けれども、ちょうどこの頃から風向きが変わりまして、大阪の展覧会をやった方が図録が売れるようになりました。観光客はあまり図録を買ってくれません。けれど、大阪の展覧会をやると、大阪の市民・府民がたくさんお越しくださるようになって、大阪ものをやると図録が売れるようになったんです。

こういった「南木コレクションシリーズ」のテーマ展以外にも、南木コレクションの資料を多く使った展覧会も開催しました。例えば、特別展「浪花百景―いま・むかし―」です❾。特別展「浮世絵師　初代長谷川貞信が描いた幕末・明治の大阪―『水の都』の原風景―」❿、テーマ展「古写真は語るおおさか水辺の風景」も開催しました。

❾
特別展『浪花百景―いま・むかし―』（1995年10月14日～11月14日）

❽ 第10回図録
「古写真 なにわ風景」

❿ 特別展『浮世絵師 初代長谷川貞信が描いた幕末・明治の大阪―「水の都」の原風景―』

⓬ 第12回図録
「瓦版にみる 幕末大坂の事件史・災害史」

⓭ 第13回図録
「古写真にみる なにわの行事・祭礼」

南木コレクションと私の思い出の展覧会

最後に思い出の展覧会のお話をさせていただきたいと思います。

最初はなんといっても私にとって初めての展覧会で、南木さんとの出会いにもなった南木コレクションシリーズ第8回のテーマ展「上方のちらし・引札展」です。次に南木コレクションの全貌を知るきっかけになった特別展「“上方”への誘い―南木コレクション名品展―」です❼。この展覧会の時に嬉しかったのは、大阪城天守閣と絶縁状態になっていた南木家の南木淑郎さんが見に来てくださり、お話しできたことです。今回探したら、名刺もちゃんと出てきました。

特別展「浪花百景―いま・むかし―」では、描かれた場所がどこで、どういう方向から描いたのかを全部、特定してみようと試みました❾。

錦絵と同じ杜若（かきつばた）が咲く時期に同じアングルで撮影しました⓫。あるいは、船が停泊するのを待って写真を撮ったりもしました。この展覧会、実は開催当時はそれほど高い評価を得ることはできませんでした。ところが、後になって火がついて、図録は何度も、何度も版を重ねてベストセラーになりました。

⓫ 特別展『浪花百景―いま・むかし―』では、昔の絵の構図に合わせて現在の大阪の写真を撮影。

とはいえ、開催してから30年近い月日がたってしまって、中身が「いま・むかし」じゃなくて、「むかし・むかし」になってしまった（笑）。それで、私が退職する少し前くらいにもう増刷はやめようと決断しました。橋爪さんの浪花百景の本も出たのでちょうどいい機会だったと思います。

特別展「浮世絵師　初代長谷川貞信が描いた幕末・明治の大阪―『水の都』の原風景―」の図録には、「歴代貞信が綴る長谷川家の画系」と題して、三世貞信、四世貞信、五世貞信の文章を掲載しました⓾。三世貞信は『上方』138号に初代と二世の貞信のことを書いておられる。大阪城天守閣で過去に開催した特別展「錦絵にみる浪花風物誌―初代長谷川貞信没後100年記念―」の図録では四世貞信が三世貞信のことを記しておられる。これらを再録して、さらに私がお願いして、五世の貞信さんにお父さんの四世貞信について書いてもらった。こうして、歴代の貞信自身の言葉で長谷川家の画系を綴ることができました。五世貞信さんのご自宅にうかがい、五世貞信さんやそのお母さんから、直接、歴代貞信のことや浮世絵に対する想いなどを聞かせていただけたのは、生涯の良い思い出になりました。

大震災の直後に「災害史」の展覧会

それから、南木コレクションシリーズ第12回の「瓦版にみる 幕末大坂の事件史・災害史」ですが、この展覧会は2011年3月19日からの開催予定で、記者発表をしました。ところが、その直後に、東日本大震災が起こったんです。「大坂大津浪図」をもとに、嘉永7年（1854）11月に大坂を大津波が襲い、海に停泊していた千石船などの大型船が次々と橋を壊しながら堀を遡っていったという話をしていたら、まさにそれを再現するかのような光景を現実に見ることになったのです⓬。

この展覧会を予定どおり開催すべきか、中止にすべきかという議論もありましたが、別にこれを中止にしたところで被災地の方々のためになるというわけでもない、むしろ大阪でもかつてこんな災害があったことを知ってもらうことの方がよほど重要で、意義があるという判断から、展覧会は予定どおり開催することにしました。

最後に。大阪の年中行事をテーマにした南木コレクションシリーズ第13回のテーマ展「古写真にみる なにわの行事・祭礼」を挙げておきたいと思います⓭。この展覧会を準備していて驚いたのは、現在、大阪市指定の無形民俗文化財になっているような行事の中に、実は一旦途絶え、南木芳太郎さんが復興されたものがいくつもあるという事実です。

私はそれまで、無形民俗文化財に指定されるような年中行事や祭礼は、途絶えることなく、ずっと伝承されてきたものとばかり思っていました。ところがそうではなく、一旦は途絶え、南木さんの尽力で復活したものがいくつもあるのです。一旦はなくなってしまったものを、南木さんが関わり、こうだったんじゃないか、ああだったんじゃないかと、あれこれ考証して復元された。これは伝承されているものを保存・継承するのとは質の違う、難しいお仕事で、創作にも通じるたいへんなお仕事です。あらためて南木さんはすごいお仕事をされたんだなと感じた次第です。 丈

⓬ 災害史の展覧会は、「大坂大津浪図」など主な展示資料を紹介して、展覧会の記者発表をした直後に東日本大震災が発生した。

第1部 プレゼンテーション2

『郷土研究 上方』の表紙

パネリスト
橋爪節也（大阪大学名誉教授）
はしづめ・せつや
日本の美術史家。大阪大学名誉教授。近代大阪の美術が専門。大阪市中央区島之内生まれ。大阪大学総合学術博物館館長などを経て、現在に至る。共著書に、『橋爪節也の大阪百景』（創元社、2020年）、『原寸復刻「浪花百景」集成』（創元社、2020年）ほか多数。

谷　それでは続きまして、『上方』の表紙絵からひも解く文化的な位相や、研究と趣味性の融合などについてのお話です。

橋爪　本日は2つの面から『上方』についてお話しいたします。1つ目が「大大阪」の誕生と郷土研究誌の創刊の話です。次が『上方』の表紙についてです。

「大大阪」誕生と郷土研究誌

皆さんご存知だと思いますけど、大正14年に大阪市は市域の拡張により、東京市を抜いて巨大なまちになりました。ニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルリン、シカゴ、大大阪の順です。

それで、谷先生が館長を務められた大阪くらしの今昔館で、2018年に大大阪モダニズムの展覧会をやりまして、「大大阪」という言葉を強調しました❶。阪神間モダニズムとごっちゃになってる人が多いようなので念のために言っておきますと、実は「阪神間」の言葉には、大阪市と神戸市は入ってない。戦前は東灘区は神戸市でなかった。編入されるのは戦後の話だから、阪神間というのは尼崎から現在の東灘区までの区域なわけです。

これらの地域に特徴的なことは何かというと、郊外の住宅地ということでした。基本的に郊外住宅地のモダニズムであるので、例えば心斎橋の大丸が阪神間モダニズムかというと、そうではない。地下鉄が阪神間に走ってるのかという話になるわけです。大丸や地下鉄こそ「大大阪モダニズム」となるわけです。

❶ 2018年、大阪くらしの今昔館で「大大阪モダニズム」展を開催

大大阪の時代をどう見るか

大大阪時代には、2つのベクトルがありました。1つは近代都市の文化を得るという面がありますが。その一方で、近代になると失われていくものを顧みるという傾向が生まれます。変貌する大阪を見て過去を顧みる意識が生まれ、それが郷土研究雑誌の創刊につながるということなのです。

大大阪モダニズムというものの範疇に、こういう郷土研究雑誌というのはありました。懐古的とか後ろ向きとかそういう意味じゃなくて、積極的にはモダニズムの現れが郷土研究雑誌の創刊ラッシュにつながったのだろうと思います。

どういうものが出てきたかというと、大正14年4月1日に『難波津』(木村旦水)、そして大正15年に『難波叢書』(船越政一郎)が出ます。それから『大阪叢書』(上田長太郎)が出まして、『郷土趣味 大阪人』(木谷蓬吟)が出て、『郷土研究 上方』(南木芳太郎)が昭和6年。これだけ続いて出るというのは、そこには大大阪誕生によって生まれた郷土研究の気運があるわけです。

これは『難波津』のチラシですが、「新しい大大阪の建設は漸次に進んでゆく（中略）　その懐かしい難波情緒を、せめて今の中に書きとどめて後世に残し置きたい」という主張が出ています。

では『上方』はどう言ったかというと創刊の辞で「滅びゆく名所史跡、廃れゆく風俗行事。敗残せる上方芸術」。敗残ですね、これどう見ますか。「一歩々々薄れ行く影を眺めて、私は常に愛惜の情に絶えません。滅びゆくものは時の勢として如何とも致方ないが、せめて保存に努めたい。そして記憶に留めて置きたい、これが私の念願でした」というのが『上方』という雑誌ができるときの基本の精神であったということです。

『上方』の重要要素「趣味性」

『趣味性』は、『上方』の重要なテーマで、例えば、近松門左衛門の顕彰というものがこの時期に行れます。実に近松門左衛門の全集が3種類出されます。

大正10年から3年間に、まず『近松全集』。次に『大近松全集』16巻というのが木谷蓬吟が出したもの。それから3番目に『近松門左衛門全集』。それぞれの編集者が誰かによって傾向が若干違う。非常に学術的なものもあるが、今問題とするのは木谷蓬吟の、彼は『上方』にも関係の深い人ですが、『大近松全集』なのです。その表紙は、北野恒富の絵だったりします❷。

❷ 『大近松全集』16巻（木谷蓬吟大近松全集刊行会）の付録版画。大正11年～14年毎号、日本画家・洋画家による近松を題材とした木版画が附録。

趣味性で問題となる『上方』の表紙

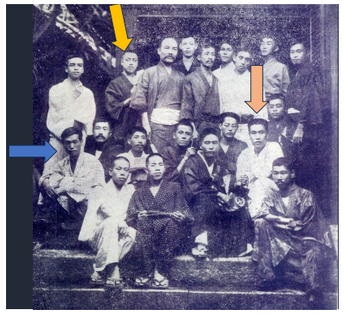
表紙だけでどこまでのことが言えるのかが、今回の話です。

『上方』の表紙を描いたのは長谷川貞信ですが、これは割と難しい。2代と3代がややこしい。主に2代貞信がやってて、2代貞信が途中で死んで、3代小信が3代貞信になるということになるんです。例えば心斎橋の鉄橋は、2代貞信の初代小信時代の作品です❸。

それから面白い写真があります❹。

❸ 2代 長谷川貞信（1848～1940）による心斎橋の鉄橋。明治8年（1875）に2代目貞信を襲名

『上方』の口絵の写真ですが、実は大阪絵画春秋会という大阪の挿絵画家の集いを写したもので、向かって右の矢印の人が北野恒富で左の青い矢印の人が赤松麟作。つまり日本画家と洋画家というジャンルを問わず、一緒になって新聞挿絵とか描いてる方々が大阪で連合して集った記念写真。後ろの一番下の黄色い矢印が小信です。



❹ 大阪春秋会・挿絵画家の集合写真(矢印は、右から赤松麟作、長谷川小信、北野恒富)

この小信が描いたものには例えばこういう宝船があります❺。左の方に書いてありますが「乗車券蒐集者」の山本不二男さん。鉄ちゃんなんですよ。それで乗車券を集めて宝船を小信につくらせるのだけど、真ん中のところにライオン橋と澪標があり、船体はきっぷで、実は路線図が描かれている。左端の三角形が天保山。そして車輪の波。こういうマニアックな、古臭い感じでなくて割と新しいことをやっている小信たちが『上方』表紙を描いていたことが興味深い。

❺ 長谷川小信が描いた「宝船」

『上方』表紙の分類から

『上方』の表紙を分類するといくつかのパターンに分かれます。一つは石川屋和助から出た芳豊の**「花暦浪花自慢」(以下「花暦」)**を原画としたもの。それから、石川屋和助や初代長谷川貞信による**「浪花百景」**からとったもの。**「浮世絵のエッセンス」**は江戸のものも含めて浮世絵からとったと解釈してもいいものがあります。そして最後に、**「新しい景観」**。実はこれはちょっと分類しきれませんし、明治懐古という意識のものも含まれます。

最初の**「花暦」**というのは、月ごとの行事が上にあって、毎月ごとに絵が変わる。例えば難波神社の綱引の絵があり、『上方』創刊号表紙はこれから取ってます❻。

❻ 『上方』創刊号の表紙と「花暦」の画像はほぼ同じ。

ちなみに版本は石川屋和助。平野町の淀屋橋と書いてある。平野町と淀屋橋筋の交点が御霊神社の近所で、おそらく今のガスビルの附近です。

『上方』の創刊号の目次には、一番左に「表紙、大阪の正月行事」と書いてあります。第2号の目次にも何て書いてあるかというと、「三色刷」とある。ところが第4号の目次を見ると表紙は「版画」と書いてあって、あとの口絵とかは「写真版」とか「凸版」とかいろいろ書いてあるんです❼。

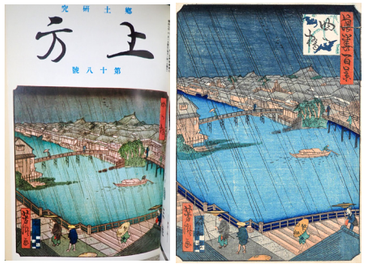
❼ 昭和6年4月1日発行の『上方』第4号の目次の一部を拡大。表紙には、版画が貼り付けられていた。

つまり「花暦」はオリジナルだけど。『上方』表紙は版画で、これをもとに作ったわけです。よくみたら画面にも微妙に違うところがある。

『上方』を立ち上げた時に風俗とか祭りとかそういうのがテーマだと思っているから、ちょうど一致するわけです。

ほんとは全部一覧表にして、第何号は何を原画とするかなどを特定したかったんですが、さすがにしんどい（笑）。結局は創刊当初の表紙は「花暦」からで。これが途中で飛び飛びになります。

それで次に**「浪花百景」**、まず1つは石川屋和助によるもので、これは芳龍、芳雪、国員の合作。この「浪花百景」と『上方』の表紙の比較をご覧になると、例えば、上にコウモリが飛んでいるようなところは再現してませんが、当時の橋があるのは、ちゃんと表現しているのが分かります❽。



❽ 『上方』表紙と、元絵となった『浪花百景』

もう一つ、余談ですが、浪花百景の天満橋風景と網島風景の絵を揃えたときに面白い物語が生まれます。橋の上で位の高い人が桜ノ宮に部下を連れて行って帰ってきた時に、真面目な部下とバッタリ出会うという感じ。この二枚がそろった時にその意味が出てきます❾。

❾ 「なにわ百景」の一連の作、天満橋と桜ノ宮

『上方』の表紙で、一番面白くて優れていると思われるのが「三大橋」と呼んでいるもの。本来の浪花百景では、難波橋を渡っている一群があり、先頭が大砲を引っ張ってる訳です。将軍家茂が長州征伐行くために上洛してきた図の系譜を引いています❿。

日本橋を出発する長州征伐の軍隊を描いた連

❿ 「三大橋」を描いた『上方』の表紙と部分拡大。大砲を引いた一軍が渡る難波橋の付近の絵が道頓堀風景に。

、図版提供：橋爪節也氏（「浪花百景」「花暦浪花自慢」などは、大阪府立図書館 おおさか e コレクション参照）

⑪ 長州征伐に出発する、江戸日本橋を描いた版画。

作版画錦絵があります⑪。その版画の日本橋の上を吉兆である鶴がたくさん舞っていて、向こうに富士山が見える。長州征伐のモチーフが導入されているわけです。それの延長線上にこの表紙絵があるのだけれど、なんで暁烏やねんというのがまず一つ面白いわけです。

それを『上方』の表紙はどう受けるかというと、橋を道頓堀の戎橋や太左衛門橋などに変えている。長州征伐をモチーフにして、三大橋を用いながら、それを道頓堀に変えたことで、暁烏が飛ぶことが理解できる。

それからもう1つの原画となったのが貞信の「浪花百景」。心斎橋北詰の綿屋喜兵衛が版元です。『上方』の表紙とこの浪花百景とを比べてみると、『上方』の表紙が画面が正方形なので、圧縮したりカットしたりしているのが分かります⑫。

⑫ 蛸の松の絵は、要素はそのままに，横方向に圧縮。

浮かんでる船のモチーフとかは一緒。同じことは浮瀬の絵にもあります。

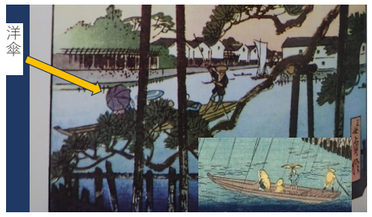
浮世絵風景のエッセンスの展開

画面の中にある足だけを拡大するのは、広重の「名所江戸百景」にこういう構図の取り方があります⑬。

⑬ 足の部分を拡大するダイナミックな構図も浮世絵にあるもの。

「蛸の松」の絵もそうですが、手前に大きく前景がある描き方は共通なんです。「野田藤」の絵も手前に植物を描いて向こうに風景画。こういうのは「浮世絵のエッセンス」を応用したものです。

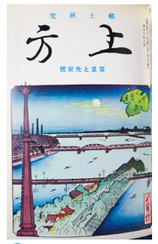
次の絵の船は向こうの人物が洋傘をもってるから近代の風景⑭。江戸時代に見せつつ『上方』の表紙は明治懐古みたいだったりします。こういう『上方』の表紙は名所図会的なものから取ってきただろうと思います。



⑭ 江戸時代の名所図会風の構図の絵でだが、舟中の人が持つのは洋傘。

新しい風景、新しい景観とは

ここまでの分類に入らない「新しい風景」では、大阪の博物場の絵などがあります。また、中之島の山崎の端、一番東の端を描いたものでは、ちょっと古い難波橋だと思いますけど、鳥居があって島の先端がある⑮。



⑮ 山﨑の端（はな）の絵は、「新しい風景」のひとつ？

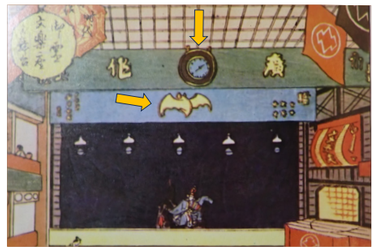
ミナミの五階の絵とか造幣局とか。昔の大阪人の大好きな「蛸蛸眼鏡」の絵（P.1－75参照）は、当時の郷土研究雑誌が必ずと言っていいくらい取り上げるテーマです。

それから「雑魚場」は朝市みたいな感じで描いてあるし、御堂さんのスイカ売りだとかいろいろな例があります。

気になるのは、『上方』の中にある独特のマークがあって⑯。浪花百景の目次のところにも同じような例がありますが、これは何らかの出典があるのか、それともオリジナルなのかはちょっとまだ分かりません。

⑯ 『上方』の表紙に現れる独自のマーク。

そして実際に、四天王寺が室戸台風で倒壊した時の表紙だとか、それから文楽関連とかも新しい図だと思いますが、謎なのは、舞台の上の幕にあるコウモリで、その上の絵は何なのかとかいうことも⑰、研究テーマとして残っています。



⑰ 文楽の劇場の図、幕の上には、なぜかコウモリの絵

私は『上方』の表紙をいくつか分類しましたが、新しいのは、正直まだよく分からない。もっと良い分け方とか分析の仕方があるかと思いますけど、一応の結論としては、最初は、もともとあった図を引っ張ってきたが、途中からは貞信の独自性が現れてきたのかなと思われます。そのあたりで面白がって趣味性の高いものを目指していたと言えるのではないかと思うわけです。以上です。

谷　私は建築学科の出身なので、「浪花百景」を見ると描かれている建物に目が行って、外観をちゃんと描いているのか、どのアングルから見たのかを考えがちです。しかし橋爪さんのお話は、その視点や分析方法が独特で興味が尽きません。

テーマにゆかりの方々からのコメント

コメンテーター：
南木ドナルドヨシロウ（南木芳太郎氏曽孫）
古川武志（元大阪市史料調査会調査員）

曾祖父、南木芳太郎の人生の転機と好機

谷　南木芳太郎さんの曾孫の南木ドナルドヨシロウ様にお越しいただいてます。一言コメントお願いしたいと思います。

南木ドナルドヨシロウ さん
（南木芳太郎氏曾孫）

南木　南木芳太郎には子が4人いました。私は長男の淑郎の孫になります。私の母も生前の芳太郎には会ったことがないそうで、それで曾祖父の姿は推測しかできないのですが、割と無口であまり余計な話をしないタイプだったようです。

私は子どもの頃は芳太郎のことを全く知りませんでしたが、中学生になった頃に、祖母に一度だけ、あなたの曾祖父はすごい人だったんだよ、と言われました。気になって、祖父の書斎から『上方』の緑の表紙の合本を開いてみたことがあったのですが、旧漢字と難解な内容で当時はまったく理解できませんでした。

その後、進学した時に、大学のゼミで曾祖父を研究してみようと思って、図書館にこもって調べました。

人生にはラッキーとアンラッキーがあって時々転機が訪れますけれど、曾祖父の人生の転機は、たぶん船場の糸屋の娘、志茂静と結婚したことで、経済的に安定したことであり、昭和初期に不況でお金がピンチになった時には、今風に言うと死に金と生き金の違いに気が付いて、全財産を『上方』に投入したことだと思います。

ちなみに芳太郎と結婚した静は、武者小路実篤と一時期、同じ敷地内に住んでいたことがあり、実篤の小説『初恋』に実名で登場します。芳太郎とは再婚でした。

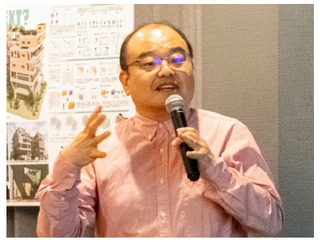
芳太郎は昭和6年から順調に『上方』を発行していくのですが、戦争の深刻化とともに経済的に困窮して、秘蔵の「南木文庫」を古典籍の売り立てに出そうとします。昭和15年頃、結局ほぼ全てを大阪の新聞舗の社長にゆずります。

それで『上方』は継続発行ができたのですが、戦局の悪化と用紙統制があって、結局、昭和19年4月に151号で廃刊になります。翌昭和20年3月に大阪大空襲を受けて、『南木文庫』は蔵ごと焼失し、全滅しました。

このように人生は幸運と不運の連続ですけれども、形のあるものはいずれなくなるので、資産として保持するより、寄贈などで有効活用し、社会貢献することが大事なのかなと思っています。

谷　続きまして、『南木芳太郎日記』の翻刻をされました古川さんからもコメントをお願いいたします。

『南木芳太郎日記』の翻刻

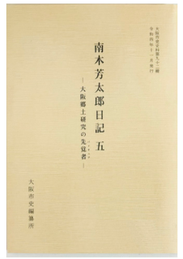


古川武志 さん
（元大阪市史料調査会調査員）

古川　私はあるとき、恩師の原田敬一先生から古本屋で南木芳太郎の日記が出ていたことをうかがいました。そこで当時、勤めていた大阪市史編纂所の堀田暁生所長に相談し、編纂所で購入してもらいました。

南木芳太郎は大阪にとって非常に重要な人物ではありますが、残念ながらほとんど世間では知られていない。そこで日記の翻刻を通して広く知ってもらおうと考えました。

いざ購入してみますと日記の中で、昭和5年が欠けていたのです。昭和5年は非常に重要な年で、南木が『上方』を発行するのは昭和6年1月ですが、前年の5年に発刊に向けての準備を含め、様々な活動をしています。また5年から6年にかけて、現在も残る多くの郷土文化活動が開催されたり、研究書が出されたりしています。



大阪市史編纂所刊行の『南木芳太郎日記』（第5巻、2022年）

5年の日記の有無について、肥田晧三先生からこんなお話をいただきました。肥田先生は南木日記にも登場されており、かつて古書店主の高尾彦四郎さんに「あなたの生まれ年の南木日記がこれやで」と見せてもらったことがある、とのことでした。調査の末、ある古書店が所有していることがわかり、めでたく購入できました。

この最後に入手した昭和5年を第一巻目に刊行しました。『南木芳太郎日記（一）　大阪郷土研究の先覚者（パイオニア）』として肥田先生に解題の労を執っていただきました。

同時に私は、大阪都市協会発行の『大阪人』で、「南木芳太郎とその周辺」という連載をしていました。その際に感じたことがあります。もちろん大阪には元々、「文化」

というものは存在するのですが、それが「大阪（文化）」にとっていかに大切かを認識し、どのようにして記録にとどめ、後世にどう伝えていくかが重要だということです。

南木芳太郎が残した足跡をたどることは、当時「大阪」が直面していた問題が明らかになる。まさに「大阪」という文化を創ってきたのが、南木芳太郎の偉大な功績だと思うのです。

『上方』の知の継承の在り様について
「上町台地 今昔タイムズ」vol.20から

報告 弘本由香里（大阪ガスネットワーク CEL/U-CoRo プロジェクト・ワーキング）

谷　続きまして、先ほど最初にお話がありました弘本さんからお願いいたします。

弘本　今日は、今昔タイムズ第20号の見開き2～3ページ下の方に掲載しているアンケートについてと❷、『上方』復刻版の発行に関して協力された方々について一部をご紹介します。

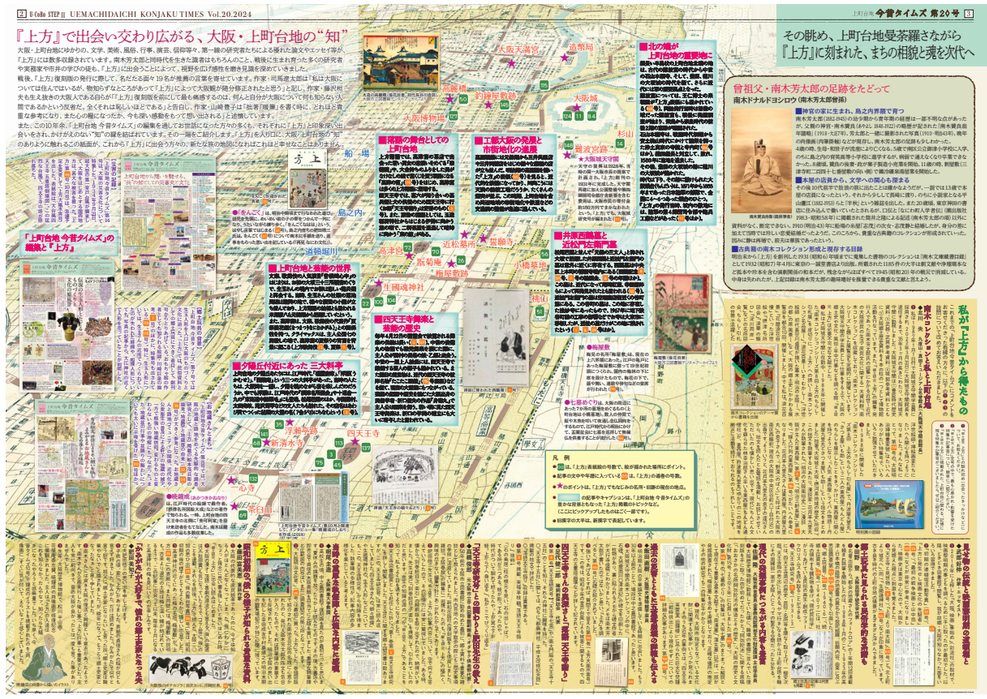
『上方』アンケートの回答から

アンケートでは、『上方』から得たものということで、10名の方に、3つの質問に答えていただいています。

その質問は、**Q1『上方』との馴れ初め（出会ったきっかけなど）**について、**Q2『上方』全号の中で、最も惹かれ、影響を受けた特集や記事**について、**Q3『上方』に掲載された、上町台地に関わる記憶に残る特集や記事**についてです。

まず、**Q1『上方』との馴れ初め（出会ったきっかけなど）**に関しては、勤務した大阪城天守閣で南木コレクションに深く関わられたお話。また、書籍『大阪「映画」事始め』の取材・執筆で『上方』に接した方。あるいは、「都会のお地蔵さんのフォークロア」と題する記事で、1933年高津・日本橋の路地のお地蔵さんの悉皆調査を引用された方。それから『大阪の歴史と文化財』の「阿弥陀池」の原稿で引用されたお話もあります。府立中之島図書館で卒業論文を準備している時に出会ったという方もいらっしゃる。

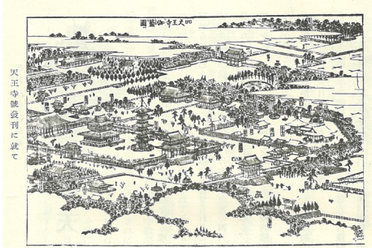
❶『上町台地 今昔タイムズ』第20号の1～4ページ見開き



❷『上町台地 今昔タイムズ』第20号の2～3ページ見開き

また『上方』には「天王寺研究号」があるのですが❸、それにより四天王寺境内の複数の神社の由来をはじめ、その奥深さを知る機会になったとも言われています。

それから、図書館勤務の仕事の一環で、『上方』は重要雑誌だと教えられたという方は、市内各地の文学散歩の際に活用したとも。そして、『大阪春秋』の編集に関わったのも『上方』の幅広い編集に触れたためと言われています。



❸『上方』「天王寺研究号」の口絵

次に高校生の頃に府立中之島図書館で夏休みの課題をほったらかして読んだという思い出も。重厚な執筆陣と広範囲の内容はいまだに調査研究のよりどころになっているとのこと。また、大阪の代表的な庶民娯楽の原点「俄（にわか）」について調べたのがはじまりだという方もいらっしゃいます。

実は、亡き肥田先生の奥様にも回答をいただきました。先生が子どもの頃、家に『上方』があり、表紙が何とも言えず好きで、『上方』だけは読めたそうです。祖父に郷土史家になりたいと言ったら、それは職業やないと諭されたが、晩年とうとう郷土史家になったというのが、先生の口癖だったというふうに振り返られています。

次に、**Q2『上方』全号の中で、最も惹かれ、影響を受けた特集や記事**などでは、まず「大阪明治挿絵画家号」が挙げられました。また「初期の道頓堀活動写真」や「上方に発生せし映画文化の先駆者」などの論考が挙げられています。そして「郷土玩具号」ですが、特集として114号と115号に連続して取り上げられました❹。

❹ 郷土玩具の記事は何度も掲載

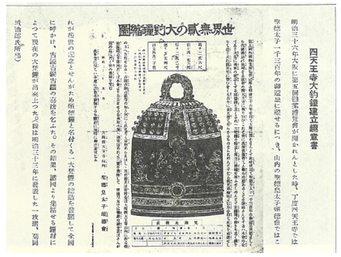
「七墓めぐり」の特集は、「大阪七墓」のまとまった解説として現在でも重要な基本文献とも言われています。また「大風水害号」では石碑「大地震両川口津波記」の掲載をはじめ、室戸台風の襲来を受けて、急遽その被害の報告をしている点に注目されています。ほかに、笑福亭枝鶴の「落語天王寺詣り」を収録しているのはとても貴重だというご指摘もありました。

また、肥田先生の思い出を語られいてる方もいらっしゃいます。先生は常に『上方』の総目次索引の縮刷版を携えておられて、時々引かれていた。先生の知識の源の一つなんだと知って、ご自分でもよく目を通すようになったそうです。

それから、大阪の復活・興隆を思って『上方』で南木さんが企画実施された催し事（『上方』行事）が、実はとても重要だったというご指摘もありました。

最後に、**Q3『上方』に掲載された、上町台地に関わる記憶に残る特集や記事**についてということで、上町台地にもゆかりのある、東西屋・チンドン屋さんの文化について、東西屋「丹波屋九里丸」の息子で漫談家の花月亭久里丸さんの記事が大変面白くて参考になったとのことです。

ほかに「天王寺と見せ物」、「生國魂神社」など、古き良き時代の情景がまざまざと浮かぶとのお話も。また現在大阪市指定となっている文化財に関する記事として、「四天王寺 英霊堂（旧鐘楼）に釣られた巨大な梵鐘」（戦時供出で現存せず）の詳細な記録もあります❺。あるいは名所・梅屋敷を描いた表紙の説明から、毎年高津の梅林に行くのが楽しみだと書かれている方もいらっしゃいます。



❺ 四天王寺の大鐘楼の詳細な記録も

ほんの一部をご紹介しました。改めて目を通して見ていただければと思います。資料と人がどう出会い、その人の人生にどう関わっていくのかということがよくわかる貴重な証言だと思います。

次代につながる『上方』復刻版の発行

もう一つご紹介しておきたいのが、『上方』の復刻版の発行についてです❻。

戦後『上方』は、大変入手困難な状況で散逸が心配されました。そして1969年から70年にかけて、復刻版が新和出版から発行されました。その結果、合本として図書館などにも所蔵されて、今も全号を私たちは活用することができます。

1970年、大阪万博の年、折しも戦後社会が大きく変貌する時期でした。現在、改めて万博というイベントを目前に控えている中で、今を生きる私たちも考えるべきことがあるのではないかと問われているように感じます。

この復刻版には、各界から錚々たる方々が名を連ねて推薦の言葉も寄せられています。そこには、趣味人と言うべき人が数多見受けられます。分野を横断して活躍している方々、政治・経済・宗教・文化など複数の顔を持って活動している方がたくさんいらっしゃいます。

皆さんとても印象深い推薦の言葉を書かれていますが、作家の方では、例えば司馬遼太郎さんは「私は大阪については住んではいるが、もの知らずなところがあって『上方』によって大阪観が随分修正されたと思う」とおっしゃっています。それから生粋の大阪人の藤沢桓夫さんが「『上方』復刻版を前にして最も痛感するのは、何と自分が大阪について何も知らない人間であるかという反省だ。それは恥ずかしいほどである」と告白されています。山崎豊子さんも「拙著『暖簾』を書く時に、どれほど貴重な参考になり、また心の糧になったか、今も深い感動をもって想い出される」と術懐されています。

こうした皆さんの言葉が復刻版の別巻に収録されています。驚くほど豊かな人間模様を感受していただいたところで、私からの報告を終わらせていただきます。

谷　ありがとうございました。ここで、コメントをお願いしたいと思います。作家の武部さんからよろしくお願いします。

❻『上方』復刻版（新和出版）の合本

テーマにゆかりの方々からのコメント

コメンテーター：武部好伸（作家、エッセイスト）
藤本英子（（一社）日本景観文化研究機構理事長、京都市立芸術大学名誉教授）

その時代の空気を感じるために熟読

武部好伸 さん
（作家・エッセイスト）

武部　僕は大阪人。生まれ育ったのが谷六で、高校も近所の清水谷高校です。

僕の執筆テーマは、大阪と映画、ケルト文化とか洋酒なんです。それで、映画で大阪ということでは、2000年に『ぜんぶ大阪の映画やねん』を出版しました。「夫婦善哉」や「王将」とか大阪を舞台にした映画をまとめた内容ですが、その時点では『上方』のことは全然知りませんでした。

2004年に古川さんの『大阪人』連載を見た時に、こういう人がいてたんやなということで、『上方』のことも知ったわけですが、2016年『大阪「映画」事始め』の執筆の際に『上方』にも目を通してみました。

これまで、日本での映画の最初は稲畑勝太郎の京都での上映と言われていたんですけども、映画の上映も興行も最初は大阪の難波でやってたことが分かってきたんです。エジソンに直談判して、機材を日本に持ち込んだ荒木和一が行ったのが、日本で動く写真を上映した最初です。

執筆時に調べていた時に、『上方』にもやっぱりいろいろ資料が出ていました。僕の知らない資料もあって、それを自分の著書にも織り込んでいきました。

その荒木和一と稲畑勝太郎との独特のライバル関係が面白いということで、小説にしようと思い、2021年に『フェイドアウト 日本に映画を持ち込んだ男、荒木和一』を上梓しました。筆名は東 龍造です。東区龍造寺町にちなんで（笑）。

当時の時代の空気が小説を面白くすると考え、再度『上方』にあたりました。それは映画はもちろん荒木さんの生活圏の心斎橋や難波とかに関連する項目を徹底的に読んで、その時代の空気感を全てこの小説に出そうとしました。

だから『上方』は僕にとって単なる情報だけじゃなくて、一昔前の大阪にタイムスリップさせてくれて、そこに僕自身が当時の市井の人たちの感覚を生身に感じることができる、そういう媒体でした。

『上方』の精神を引き継いだのは、もう今は休刊とか廃刊になった『大阪人』であり、『上方芸能』や『大阪春秋』でした。

最後に、古川さんが連載で言っていたように、南木さんは大阪文化の第一人者だと私も思いますし、『上方』は一昔前の大阪にタイムスリップさせてくれる、本当に大阪文化の宝物だと思います。

谷　ありがとうございます。引き続き、景観文化の研究者のお立場から藤本さんにコメントをお願いします。

皆さんも現在の大阪を書き伝えてほしい

藤本英子 さん
（（一社）日本景観文化研究機構理事長、京都市立芸術大学名誉教授）

藤本　私は、こうした場に参加させていただいて、大阪のことを勉強させていただいてきたという感があります。

大学は京都市の芸術大学で、この3月までデザインを教えていました。でも実は私は大阪 lover なんです。でも本当に全然学んでなかったと、ここに来ていつも思っていました。今日は南木さんと『上方』の話、もっと深く知りたいと思います。

私たちの時代に『大阪春秋』があり『大阪人』があり、そしてこの『上町台地 今昔タイムズ』があったと思えます。

私はこれまで、景観の専門家として、道頓堀の遊歩道そして北浜テラス、梅北の一期の方の審査員や戎橋のデザインコンペの審査員を務めたりと、大阪づくりに参画してまいりました。

私自身、1970年の万博で目覚めて、この分野に入ったんですが、その理由は、シビックプライドが重要だと思うからです。皆さん個人のプライドの一部に皆さんがお住まいの場所のアイデンティティが入ってると思うんです。

現在の大阪人はあまりにも過去のことを知らないですね。それでも、例えば景観の中に少しでも大阪の真髄みたいなところが残っていたらいいと私は思います。

それをつくる側で私は参加していますけれども、南木さんのように、それを復興したり、そして書いて残していく方にも学んでいきたいと思います。ですから、ぜひ皆さんも現在の大阪を記して残すようにしてほしい。書き伝えて発信していかないと、次の文化は伝承出来ないと思います。

それから古川さんがおっしゃったように、まさにそれをつくる私たち自身が文化であり、文化をつくること自体が大阪の文化なんだというふうに思いました。

ここからどうなるのか、そして皆さんと私たちの、この大阪からの発信や記録は、いったいどうなるかというところをディスカッションできたらいいなと思います。

第2部　パネリストとのディスカッション

谷　第2部を始めますが、まずはパネリストのお二人に、『上方』と大阪文化について、改めておうかがいしたいと思います。

『上方』との出会いは？

北川　私は神戸大学文学部史学科の国史学専攻出身なんですけど、その時の先生のお一人が高尾一彦先生です。大阪城天守閣と因縁深き高尾彦四郎さんのご長男です。先生は古書店で生まれ育たれたわけですけれども、そのお店にはいろんな人たちが訪ねてきて、書店がある意味サロンみたいになっていた。それがすごく魅力的でねと、ご自身が研究の道に入った理由を語っておられました。

大坂には江戸時代、藩がありませんでした。したがって藩校もなく、幕府の学問所もなく、懐徳堂がそれに代わるかたちになっていました。そういう意味で、やっぱり富裕な商人たちが経済的に余裕があって、趣味や学問に走り、いそしむ。それが大阪の文化を生み出し、支えたんだと思います。大阪には、近代のある時期まで、ずっとそういう雰囲気があったわけです。

橋爪　私は、学生時代の美術史講読で田能村竹田「山中人饒舌」の木村蒹葭堂の回があたりまして、発表の準備で『上方』にある木村蒹葭堂の特集号に接したのが最初です。

文人の存在や文人画は大阪が強いところですが、美術史の世界は東京や京都中心で話が進められて、大阪は無視されがちな領域でもありましたが、そういう江戸時代の文人性みたいなものが近代とか現代社会までどうつながるのかを見ると、“趣味人”と呼ばれた人たちが大阪における、文人的なものの置き換えなのかなと思ったりもします。

次に、大阪は民間のまちとされますが、時々民間の“間”の字を役人の“官”にした方がいいような堅苦しい“民官”もある気がします。江戸時代でも、江戸の旗本のほうが好き勝手やってて、蒹葭堂とか大阪の町人の方が基本は真面目です。しかしその生真面目さが、大阪人の主体的な活動をよびおこします。

大大阪が誕生してまちは変貌していくだろうが、過去の文化を記録する文化的な事業も、自分で自発的にやったらいいということになる。身代傾けても出版しまっせ、とまで言うのは言い過ぎですが、『上方』刊行も「自分で何とかしたろ」的な感情です。他人任せな論評で終わり、主体的な活動に進まないのは、本当の民間じゃないと言いたい。

南木にはモダニズムが漂う

谷　今日のお話を聞いて思ったのですが、南木さんは懐古趣味という言葉で評価されていますが、それだけではないようです。懐古趣味というと時代や社会に後ろ向きというイメージがありますが、『上方』のテーマを見ると、もっと積極的な位置づけが出来そうですね。近代社会が失っていくものに光を当てようとしているのでしょうか。

橋爪　私は、基本的に南木芳太郎にはモダニズムがあると思っています。彼が育った新屋敷はミナミの地域で、文化的ストックがあるところ。たぶん御堂筋が拡幅されてる工事とかを見ながら、南木は編集出版をやっている。懐古的な面は持ってるけども、実は新しいものも吸収しています。それを単なる懐古趣味だと勝手に決めつけてる人が悪い（笑）。

北川　『上方』に掲載された論文を見ていると、硬い学術論文もあるけれど、柔らかいのもある。それがいいんですね。それが『上方』の味になっている。高度成長の時代、ちょうど万博の頃に、私が住んでいた地域は激変しました。その時は、私自身、明るい未来が見え、右肩上がりが今後も続く将来を見ていたんですが、しばらく時間が経つと、自分たちが発展だと思っていたことが、ほんとうに「発展」なんだろうかと、疑問を抱くようになってきたんです。

創造性豊かな南木芳太郎

北川　南木さんの創造性については、行事の復活にうかがえると思います。なくなっていたものを、南木さん流で新しく創る。「復活」とはいうものの、それは創造に通じる作業だったのではないか、と思っています。単なる懐古主義ではなくて、未来・将来に向かって、南木さん流に新しい「過去」をつくっていく、「歴史」をつくっていくという意欲を感じます。悪い意味ではなくてね。

それと、大阪の学問、町民の学問に関わっていうと、やっぱり今の大学は成果主義で、「得点」になる論文を書くことが要求される。『上方』という雑誌は、そうした現代の学問の動向とは明らかに異なる価値観をもっている。それがいいですね。職業として学問に取り組むのとは違う、商人の学問の真骨頂がそこにある。大好きな自分たちのまちのためにやっている、あるいは自分が好きだからやっている、という感覚だったんじゃないでしょうか。そこに、『上方』という雑誌の大きな価値があるのではないのかと思います。

谷　いろいろなキーワードが出てきたのですが、南木さんの仕事を見ていると、現代社会にも大きな示唆を与えてくれそうです。当時の日本は、西洋の進んだ文化や技術を取り入れなきゃいけないと言って、ずっと突っ走ってきました。その中で南木さん流の抵抗といいますか、大阪の持っている力に光を当てたいというのが『上方』の特集に表れているのではないでしょうか。

そこには伝統的なものもありますが、例えば災害を取り上げてその後の復興まで特集しているのは、文化の継続と再生への思いがあるのかなと思います。

南木さんとの出会いと私

谷　南木さんに最初に出会われた頃というのは大体何年ぐらいなんでしょうか。

北川　私は20代の後半。その頃は日本全体が、高度成長からバブルへと向かう頃、右肩上がりの幻想を、まだ見ていた時代と言えるのかもしれません。

南木コレクションとの出会いは、ある意味衝撃的でした。私は、江戸時代の庶民信仰、とりわけ西国巡礼とか伊勢参宮、金毘羅参

詣、善光寺参りなど、「旅と宗教」が研究テーマで、旅人が残した道中記をたくさん収集していました。それらの道中記に記されていたお店の引札などが、全部南木コレクションの中にあったんですね。今までは文字の上でしか知らなかったお店の構えとか賑わいとか、それを引札などから実際に知ることができて、今まで姿・形のなかったものがリアルな姿をもって浮かびあがってきました。

以来、南木コレクションにたいへん興味を持つようになりました。『上方』については、高度な論考から柔らかいものまで、性格の異なるさまざまな文章が一冊の雑誌の中に収まっているという印象を持っています。

谷　ありがとうございます。文献などに現れてこないような文化の伝承などが『上方』の中にあふれているわけですね。

北川　南木コレクションは『上方』に掲載するために集められたので、ある意味、『上方』そのものとも言えると思います。ただ、当時の大阪市立美術館や大阪市立博物館は、やっぱり名品主義で、そうした庶民生活資料は、博物館・美術館に収蔵する資料としては評価されなかったんだろうな、と思います。

橋爪　それは、いかにもありそうな考え方で、タブローや本画のほうが偉いという考え、価値観だと思います。

私が『上方』に触れた最初は大学の演習のときで1979年です。本腰をいれたのは、産経新聞に「モダン道頓堀探険」の連載をした時だと思います。その次には、美術館の学芸員として北野恒富を研究したときです。『上方』の大阪「明治挿絵画家号」をよく見ました。ほかの分野の人が見てる『上方』と違うイメージがあります。

学問と遊びは表裏のもの

橋爪　南木さんは、木村兼葭堂と感じが重なるなあと思います。『上方』は学術雑誌というよりは、ちょっと緩いところがありますよね。表紙の張り付けの版画を見て楽しむ、これは手で触ったりして風合いを楽しんだりする。また、凝った宣伝広告がたくさん載っているのも興味深い。

たぶん近世から、そういう学問と遊びというのは裏表だという考えはあったんだと思うんです。それが近代化の中で評価されにくくなった。

北川　江戸時代、大坂では、大坂城代とか定番・加番といった大坂城の役職に大名たちが入れ替わり着任して来ました。彼らの中には、大坂に行ったら、あの木村兼葭堂に会えると、それを楽しみに大坂に赴任してきた大名もいました。

橋爪　大阪にはそういう土地柄があった。

谷　ただ、学問社会の中では損をしてるかもしれないですね。先ほどの得点をもらえるような論文を書くという考えとは多分対極にあるのだと思います。

北川　私にとって、『上方』は歴史的な存在で、既に史料です。当時の方々が、気取らず、自分の言葉で発言したり、書いておられたりするのも、『上方』という雑誌の大きな意味ではないかと思います。

谷　そういう大阪の文化がずっと評価されずにきて、どちらかと言えばマイナーになってしまっている。確かに東京の人には、上方に対する憧れもあるんだけども、例えばどちらから来られましたかって聞かれて、大阪ですというと、大阪ですか（笑）みたいな。だから大阪はずいぶん損をしていると思います。『上方』と当時の文化をもっと再評価しないと、本当にもったいないなと思いますね。

今昔タイムズの編集と『上方』

谷　私は、大阪は歴史都市と思うのですが、大阪の人は最先端都市だと思ってるんですね。だからいつも東京と競争しなきゃいけないと思ってしまう。大阪独自にゆっくりと行こうという感覚があんまりなくて、いかにも中途半端なんです。

弘本さんは今昔タイムズ編集に、いつも参考にされたのが『上方』だったと思いますが、どんなふうに思っていましたか。

弘本　『上方』を勉強してから今昔タイムズを始めたというよりは、まちの人たちと接していると、郷土史を研究している民間の方々と同様に、自然と『上方』に出会っていたという感じですかね。

そのまちの人たちとともにあるテーマ、例えば災害について考えたいと思った時に、大阪城の南木コレクションと北川先生に出会い、そして肥田先生に出会い、お話を聞いて改めて南木コレクションのすごさに気が付かされました。

そういう出会いの循環のなかで『上方』に触れることで、常に地域の風土に交わっているという感覚が非常に強くあります。

もう一つは、先ほどの光と影という話で言うと肥田先生の奥様のコメントの中に書かれているんですけど、先生も南木さんと同様に大阪文化の復活の意識があったようですとおっしゃっています。「主人も常に前向きで、昔の大阪が良かったとかは、一度も言ったことがありませんでした」と言い切られているんですよ。

さきほどもご指摘があったように、私たちはともすると、南木さんや肥田先生を何か古いものをとても大事にしている人だというふうに、先入観で捉えてしまっているかもしれないですが、実はものすごくモダンな方で、決して懐古主義ではないということを強調されているんですよね。

近世と近代の関係性の点でも、例えばモダン大阪をテーマにした今昔タイムズ13号があるんですね。これは大阪で内国勧業博覧会があった時代に、どんな若い世代の人たちが活躍したのかというのを群像的に扱ったものなんですけど、ここでもやはり新しいことやってる人たちの根っこが、実はとても近世的なものにあるということを感じざるを得ないんです。例えば稲垣足穂みたいな人であってもその根っこのところには近世の大阪が持っている、何とも言えない温度を抱えているという感じがするんです。

そういう土壌としての文化の継承みたいなものが大阪の独特の味わいで、冒頭の橋爪先生がおっしゃった引用の文化とか転用の文化とか複製の文化とかも相まって趣味性みたいなものが発揮されていたと思います。その趣味性みたいなものが、実は分野とか属性を超えていく役割を担っていて、それが大阪の特徴の一つでないかと思われます。

これからの世の中はそういう包摂性とか多様性みたいなものが重要で、それをどうやって実現するかというときに、意外と趣味性というのは鍵になるのかなという感じがしています。みんなでもっと遊びましょうみたいなことが、ふざけてるわけじゃなくて本質的に大事なことじゃないかなという感じがしています。

谷　ありがとうございます。今昔タイムズは『上方』の現代版と思いますが、もう一つこの上町台地には地域情報誌『うえまち』というのがあります。これをずっと発行してこられた、竹村さんが今日お越しなんで、ここでコメントいただければありがたいです。

テーマにゆかりの方々からのコメント

コメンテーター：竹村伍郎（NPO まち・すまいづくり理事長、地域情報誌「うえまち」発行人※ WEB 版）

地域の変化に危機感を抱いて活動

竹村伍郎 さん

竹村　NPO 法人の活動として、16年間『うえまち』という新聞をタブロイドで、毎月、284号ぐらいまで出してたんですけれども、やむを得ぬ事情で印刷版は休刊し、今はウェブでやっています。私の立場からは、今日のテーマの『上方』に関して何も申し上げることはありません。

けれども活動については、最近いろいろ考えています。大阪は戦災でとことんやられて、それから高度成長でなんかひん曲がってきて、最近はコロナ、タワマン、粉もん、ちょっとこわいよね、という考えです。

『うえまち』はコロナで広告がゼロ近くになってしまった。印刷版は経費が毎月数百万円かかったんですが、とてもじゃないけど継続は難しかった。

今は、活動していても横のつながりを持てなくなってしまっている。それを何とかしようじゃないかということで、少しずつやっております。

それから、タワマンなんですけれども、景観を完全に壊してきている。学校関係者の方に聞きますと、ものすごく小学校に子どもたちがきてると。かつそのタワーの中でほとんどコミュニケーションが取られてないということらしい。私が知る限りでは、この後の計画が20本ぐらいあります。それが非常に気がかりです。

それと粉もんです。これが万博のポスターみたいなものの真ん中で女性がたこ焼き食べてます。大阪の食を貶めている。大阪がそれには何も発信してこなかった。

そんなことを思いながら、中央区で私、勉強会のお手伝いをさせてもらっています。連合町会長がタワマンが沢山出来たので入居者にもこの地のことを知ってもらおうというのをお手伝いしたんですが、いざはじめてみたら地域の人の方がむしろ知らないということがわかった。私は『上方』について、すごいなと言うことしかコメントできない。けれども以上のような危機感を持って動いているということで、ご報告させていただきます。

谷　ありがとうございます。現在も、いろんなところで多くの人が小さくはあるけど動いている。しかし実際はそれが横につながっていかない面もあるのですね。

都市のアイデンティティを踏まえて

谷　今とりあえず休刊とおっしゃいましたが、実は『上方』も151号で休刊になりました。この今昔タイムズも20号で最終号と書いてあります。だけどこれでやめたとは書いてないんですね（笑）。

だから今昔タイムズも『うえまち』も、これを支えていく地域の人たちの力が必要なんですね。コロナも一応収束して、これから前を向いていこうというときに、目指すべきは東京と勝負する先端都市ではないだろうと思います。むしろ大阪人のアイデンティティ（帰属意識）をしっかりと踏まえ、大阪の将来像を展望していかなきゃいけないと、今日のお話を聞いていて強く感じました。

先ほど『上方』は後ろ向きかという話をしましたけれども、モダンの時代に出てくる懐古趣味、それは実は後ろ向きの懐古ではなくて、それと対等の、もう一つの大きな柱であると考えていくと、むしろきちんと継承される必要があるんだろうと思います。

今昔タイムズを企画発行している大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所も、ある意味で現在の南木さんと『上方』ではないかと思います。

企業も文化政策というか、文化の大きな後援者の役割を担っています。大阪の企業には、やっぱり大阪の文化を継承して行く一翼になっていただきたいと期待しています。

それぞれが自分の場所で考えること

谷　今日議論されたことは、これでおしまいではありません。これから何回も議論をして、未来に向けてどうすればよいのかを考えることが大事です。今日がそのきっかけになったらいいなと思います。

ここにお集まりの皆さんも、今日の議論を元にして、ご自分の持ち場でできることを考えてください。そして実践してください。私はもう一度こういう交流の場をもちたい

と思います。今日で終わりという一過性のフォーラムではなく、次の機会まで、皆さんにも頑張っていただきたいと思います。

大阪独自の遊ぶ知識人の系譜

橋爪　かつての兼葭堂の時代、京都と大阪での地元の知識人の人名録、つまり「平安人物誌」と「浪華郷友録」では枠組みが異なるのです。

どう違うかというと、大阪では、職業的な知識人として学者、医者、僧侶がおりますが、それと並んで文人と音が通じる「聞人」という枠があって、これには職業関係なしで芸苑（漢詩や書画など）に遊ぶ者をさしました。町人学者もこの範疇です。兼葭堂などが典型でしょう。この概念は江戸にも京都にもない概念です。大阪にしかないということも私は何度も論文に書きましたから、ご覧ください。

それから『上方』で重要と思うのは、論文だけではなくてテーマをさだめた上での座談会という形式。座談会での当意即妙な反応が面白い。「何言ってはるのこの人は」みたいな会話があったりしても、当時の人ならピーンと分かる意味が背後にあるのですね。座談会を文字化して編集者が整理していく過程で、言外のニュアンスが込められていく。バラバラなこと言ってるわけですけども、最後活字化していると、全体に通底するものがやっぱりちゃんと読み取ってもらえるという形になると思います。

谷　高度経済成長によって日本人は経済的に豊かになってきました。しかし儲けるだけでは心は豊かにはなりません。これからは、どうやって儲けた利益を社会還元していくかが問われています。このフォーラムは、社会還元の良い例だと私は評価しています。こういう取り組みを継続していただくようお願いします。

最後にコーディネーターから、まとめに代えて一言述べさせていただきます。

南木芳太郎の『上方』から学んだことを私たちがどう生かしたらよいのか。現代には、南木さんが生きた時代には思いもつかなかったテーマがあると思います。また南木さんの没後80年間の流れも歴史の蓄積になっています。これを私の専門分野に引き寄せると、住まいのリノベーションや町並み保存などはまさに南木さんが言いたかったことだと思います。そして南木さんが近代化の最先端としてほとんど無視した近代建築も、今や歴史的遺産として保存再生の対象になっています。今、南木さんが『上方』を編集したら、きっとこのテーマで特集すると思います。

もう一つ、橋爪さんが強調された「趣味人」は、当時は少数のお金持ちの「遊びごころ」であったかもしれません。しかし現代では普通の人（この会場に参加された皆さんはさしあたり現代の趣味人です）が「まち歩き」を企画したり参加したりして趣味を満喫し、インターネットで大阪の魅力を発信しています。

こうした新しい「芽」に注目すると、南木さんのように大阪を思う心はいつの時代にも生きていて、現在は少数の趣味人ではなく、まちに住む普通の人にも情報発信の機会があるのではないかと思います。そうした市民の実践を支え、より積極的に連携していくことが、こうした民間の場はもちろんのこと、これからの図書館や博物館などの役割にも求められいると思います。

今日の今昔フォーラムを終えて、南木さんのように遊びごころをもって大阪の文化を育てていきたいものだと改めて思いました。

弘本　ありがとうございました。これまで今昔タイムズとフォーラムで、皆さまとともに紡いできた対話のエッセンスが、次の世代につながっていくことを願って、今日の集いを終えたいと思います。

今昔タイムズは、読み捨てられるものとしてではなく、長く手元に置いていただけるものでありたい、繰り返しご覧いただけるものでありたいとの思いを込めて編集・発行して参りました。1～20号のストックを、今後も様々な場面でご活用ただけましたら幸いです。

フォーラム終了後、約1か月間、当日の録画映像を希望者への限定配信でご覧いただきました。

U-CoRo プロジェクト アーカイブズのご紹介

写真は今昔タイムズ 20号（最終号）記念フォーラム開催時のバックナンバー展示です。

U-CoRo プロジェクト第2ステップとして2013年から2024年にかけて発行した『上町台地 今昔タイムズ』全20号及び、毎号のテーマを深堀りしたフォーラムのドキュメント・レポートは、アーカイブズとしてすべてホームページ（大阪ガスネットワーク CEL/U-CoRo）で公開しています。前史となった第1ステップ（2007年～2012年）のウィンドウ展示・全15回のアーカイブズもご覧いただけます。
右の二次元コードからアクセスできます。